

福岡工業大学 学術機関リポジトリ

Groupwork using Teams and their educational value: A case of “Psychology of Communication”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-08-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 美香 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/11478/00001686

Teams を用いたグループワークの教育的価値： 「コミュニケーションの心理学」における導入事例

中 野 美 香 (教養力育成センター)

Groupwork using Teams and their educational value: A case of “Psychology of Communication”

Mika Nakano (Center for Liberal Arts)

Abstract

In 2020, online classes in higher education became necessary because of COVID-19. This had a considerable impact on active learning, which fosters mutual understanding through peer communication. The purpose of this study was to examine Teams as a tool for online group discussions and to explore its educational value in higher education. In “Psychology of Communication”, students participated in presentations and small group discussions in two of 15 remote classes by using the functions of Teams’ Breakout Room. The final 230 reports were analyzed to reveal the educational value of the new attempts. The results revealed three primary things students learned during group discussions, which were expression and steps to facilitate discussion smoothly, respecting various values, and the importance of ice-breakers and self-disclosure. However, the disadvantages associated with online discussions included communication difficulties such as anxiety for others’ lack of reactions and understanding when the camera is off. Based on those findings, effective instruction should be developed.

Key words: *Online Discussion, Liberal Arts, Literacy, Communication, Breakout rooms.*

1. 問題と目的

2020年度、感染症対策のため多くの大学は遠隔講義の実施を余儀なくされた。その中でも受講者同士のコミュニケーションを伴うアクティブラーニング型の講義では講義内容や方法の見直しを迫られたことで、新しい教育方法が創出されている。オンライン上でのコミュニケーションを実現するためにはツールやそれを用いた講義進行のみならず、受講者の心理や学習環境への配慮も求められる。今後の見通しが立たない状況において、一時的な対面講義の代替というよりは、ICTによるコミュニケーション教育に積極的な価値を見出すことに意義があると考えられる。実際にこれまで、ポスト・コロナ時代に目指すべき教育の在り方についての提言¹⁾や遠隔講義への移行に関する知見²⁾、

振り返りを中心としたコミュニケーション教育の方法³⁾など新しい価値を提案する研究が報告された。また、グループ・コミュニケーション・ルーム⁴⁾の活用、自己決定理論⁵⁾に基づく学習者主体の遠隔でのアクティブラーニングの実施⁶⁾など具体的な教授法の開発に関する研究が続々とおこなわれている。その一方で、遠隔でのコミュニケーション教育に対してどのように受講者が認識したかを明らかにする研究が不足している。

コミュニケーション教育の転換期において、小浜(2021)が指摘したとおり、コミュニケーションのユニバーサルデザイン⁷⁾という視点は極めて重要である。環境や状況等、受講者の特性に関わらず誰もがストレスや疎外感なく授業に参加できるようにするためには、受講後の学習者の声を手

掛かりに改善につながる知見を蓄積していく必要がある。そこで本論は「コミュニケーションの心理学」の遠隔講義における Microsoft Teams を用いたグループワークの導入方法を紹介し、受講者の認識を明らかにすることでオンラインでのコミュニケーションの教育的価値を考察することを目的とする。

2. 講義概要

本節では講義の計画を 2.1 で述べた後、2.2 で Teams によるグループワークの導入方法を説明する。

2.1 講義計画

「コミュニケーションの心理学」は全学科の学生が受講する後期開講の教養科目(2単位・選択)である。講義の目標は以下のとおりである。「心理学の基礎知識をコミュニケーションを通して獲得する」「事例を用いて理論的な内容を他者に説明できる」「心理学的な問いを立て、他者との議論を通じて探求することができる」。講義は各回で心理学の主領域について学習しながらコミュニケーションの技法についても学び、学習内容についてグループでディスカッションを行うこととした。各回の心理学のテーマを以下に示す：①コース・イントロダクション／コミュニケーションとは、②パーソナリティ、③感覚・知覚、④学習、⑤記憶、⑥感情、⑦行為、⑧知能、⑨発達、⑩無意識、⑪心理的支援、⑫対人認知と対人距離、⑬対人関係、⑭集団。第15回はレポート作成および解説をおこなった。グループディスカッションの技法⁸⁾について講義で扱った内容は以下のとおりである：②グループディスカッションの進め方、③他者から見た自分の理解、④相手を受け入れよう、⑤アイスブレイク、⑥スモールトーク、⑧司会をしよう、⑨グラドルール⑩テーマの分析、⑪アイデアを広げて絞り込む、⑫話し合いのステップ、⑬意見交換しよう。

2020年度は受講者が1クラス100名程度と感染

症対策が困難なため、すべての講義を遠隔で実施することとなった。筆者が担当する3クラスでは受講者の学習環境を考慮し、15回中、13回をオンデマンド型の動画を用いて講義をおこなった。オンデマンド講義では動画とワークシートを用意し、動画を視聴する前後で同じ質問に回答することで理解や認知のギャップに気づきやすくした⁹⁾。また、その振り返りを他の受講生とオンライン上で共有することで異なる意見に触れる機会を設け、対面でのディスカッションの代替とした。また、第7回と第14回講義でライブ講義を実施し、前半と後半のまとめおよび学習した内容の実践として、プレゼンテーションおよびグループディスカッションを実施した。

2.2 導入方法

2.2.1 事前準備

事前準備は4点に分けられる。オンライン講義の導入が決まった段階で権限を持つ本学の情報基盤センターにクラスごとに Teams のチームの作成を依頼した。受講者には初回のオリエンテーションで講義計画を共有し、発表の準備を各自で進めるよう伝えた。プレゼンテーションのテーマは講義の前半と後半で学習したものから1つ選んで3分間の発表資料を準備することとした。ライブ講義の前週に会議のリンクを授業資料で提示し、参加登録してもらった。そして講義の前日までに本学のオンライン上の学習システム「myFIT」の「クラスプロファイル」の「授業資料」で注意事項、会議のリンク、授業の流れ、ワークシート、課題等を提示した。講義当日は30分前から会議を開始し、カメラのオン・オフは学生に任せることにした。

2.2.2 講義

ライブ講義当日のスケジュールを表1に示す。受講者が混乱しないようにスケジュールは第7回・第14回のライブ講義で共通とした。始めに一般の会議で受講者全員に説明した。トラブル等で入室が遅れる場合を想定し、開始から20分間を講

義とグループ分けおよび操作説明の時間とした。ここでは、オンラインでのグループワークに慣れていない学生に配慮し、対面でのグループワークとの違いを示し、はっきりと言いたいことを伝えることや、相手が不安にならないようにすぐに反応を示すなど、受講者の能動的な参加が必要であることを伝えた。また、時間管理が難しいことから司会者とタイムキーパーをあらかじめ決めておくようにした。トラブルが起こるのはよくあることとし、グループで解決できない場合はチャットで教員に質問するよう伝えた。またグループに移動後は速やかにステップに沿ってグループワークを進められるようにあらかじめスケジュールを授業資料で提示すると共に、講義中もスライドで示し、手元に資料がない場合は写真を撮るように指示した。必要事項の説明の後、講義資料を用いて説明をおこなった。

表 1 ライブ講義のスケジュール

時間	内容	所要時間
0～20分	注意事項・操作説明 講義	【20分】
20～25分	移動	【5分】
25～90分	グループワーク 1. 自己紹介・役割決め 2. プレゼンテーション (3分発表+2分QAコメント) 3. ディスカッション テーマ①②	【65分】 10分 25分 (5分×5名) 30分 (2分×15)

講義開始 20 分後、Teams のブレイクアウトルーム機能を用いて受講者を 5 名で構成されるグループに分けて、移動してもらった。グループ数の設定に数分時間を要するため、移動の案内が表示されるまでプレゼンテーションの準備をするよう指示した。プレゼンテーションでは画面共有機能を用いることとした。ディスカッションの 2 つのテーマについては、第 7 回講義では「①大学生にとって幸せとは何か」「②大学生が心理学を学ぶ意義は何か」とした。第 14 回講義では、テーマを発展させて「①「豊かな人生を送るためにはどうすれ

ばいいか」②「大学生が心理学を学ぶ意義は何か」とした。②は 2 回とも同じテーマであるが、講義やグループワークの反省を踏まえて前回よりも深い議論ができるよう伝えた。グループワーク中は集中力を維持し、学習の記録を残すためにワークシートを準備した。ワークシートはグループのメンバーの発表の評価と、ディスカッションの内容をメモしてもらった。グループワークの時間はグループの進行によって異なるため、終わったグループは別のテーマについて議論したり、課題をおこなう時間とした。グループワーク中は教員と講義補助の学生(クラスサポーター:CS)で見回り、質問はチャットで随時、受け付けた。

2.2.3 講義後の課題

授業中にワークシートに書いた内容を基に、振り返りをクラスプロファイルの課題から提出してもらった。提出した課題は受講者が相互に閲覧できるように設定し、共有した。これにより、他のグループの活動の様子や多様な意見を知ることができる。翌週の講義で振り返りに対して教員からフィードバックをおこなった。

3. 方法

本論の目的は講義で導入したオンラインでのグループワークに対する受講者の認識を明らかにすることである。2020 年度の「コミュニケーションの心理学」の受講者に第 15 回講義で記述してもらった講義全体の振り返りを分析した。受講者 260 名のうち完全な回答が得られた 230 名分のデータを分析対象とする。本論で分析した問いは、「Teams などのオンラインでのディスカッションと対面でのディスカッションを比較し、相違点を説明しなさい」と「グループディスカッションの講義で学習したこと」の 2 つである。すべての回答に対して筆者を含む 2 名でコーディングをおこなった。意見の不一致がある場合は議論により解消した。

4. 結果と考察

4.1 オンラインと対面でのコミュニケーションの相違点

コーディングの結果を表 2 に示す。回答は多かったものから「コミュニケーション」「PC 操作関連」「快適さ・利便性」に関する 3 つのカテゴリーに分類できた。

表 2 対面とオンラインのグループワークの相違

カテゴリー	項目	N
コミュニケーション	表情, 反応がわかりにくい, リアクションを大きくしないといけない	37
	話をするタイミング, みんなが遠慮してしまう, 積極的に話す	9
	気持ちが伝わりにくい	7
	目線に気を付ける	4
	資料を共有できる	2
	困ったときに誰かに助けてもらいづらくなる	2
PC 操作関連	ツールや Wi-Fi などの設備が必要になる	10
	カメラ ON にした方がいい	10
	音声が聞き取りにくい	5
	背景を気を付ける	3
	ツールに慣れておく必要がある	3
快適さ・利便性	あまり緊張しない, リラックスして臨める, 大きな声を出さなくてよい	8
	どこにいても参加できる	5
	途中で水分補給ができる	1

1 つ目の「コミュニケーション」に関連する項目は、「表情, 反応がわかりにくい」「リアクションを大きくしないといけない」「相手の表情や反応がわかりにくい」という反応に関する回答が群を抜いて多かった。講義でカメラのオン・オフは自由としたところ, オフの状態でもグループワークをおこなうグループが多数であった。そのため相手が見えない状況でコミュニケーションをとることに慣れておらず, 相手の反応がないと調整しづらかった学生が多いことがわかる。この後「話をするタイミング」「みんなが遠慮してしまう」「積極的に話す」などグループ全体の相互作用に関する

項目や, 伝え方に関する項目が続いた。画面共有機能を用いて資料を共有したり議事録をとることでディスカッションやプレゼンテーションの理解や話し合いの質が高まるという利点があるが, 一方でオンラインでは困った時に助けが得にくいという回答もあった。

次に, 2 つ目の PC 操作関連の回答については, ネットワークなど受講に必要な機材や環境やツールに関する記述が含まれた。カメラはオンにした方がいいという上記の「コミュニケーション」のカテゴリーに関連するコメントもあった。また知識として知っているだけでなくツールに慣れる必要性も挙げられている。

3 つ目の「快適さ, 利便性」については, オンラインで受講する利点として言及されていた。コロナ禍で遠隔が求められる状況においても他の受講者とコミュニケーションが取れるというポジティブな面に注目していることがわかる。また, むしろ「あまり緊張しない, リラックスして臨める」「途中で水分補給できる」という対面でないコミュニケーションのメリットを挙げた回答もあった。

4.2 グループ・ディスカッションの学習内容

学生は講義と実践を通じてグループ・ディスカッションの何を学んだかについて, 回答数が多かった項目から順にまとめた結果を表 3 に示す。

回答数が最も多かったのは, ディスカッションの進行方法で, 意見を交換することの価値や, アイスブレイクや自己開示の重要性に関する記述が続いた。これらの 1~3 番目に挙げられた項目は特に多くの受講生が学習したことがわかる。次に 4~8 番目の項目は, 傾聴, 広い意味で他の学生とコミュニケーションをとること, 他の意見を受け入れる, 役割決め, リアクションなどの非言語コミュニケーションに関連する回答が挙げられた。9 番目以降は, 雰囲気作り, 多様なディスカッションスキル, スライド作成, 伝え方, ルール作り, 積極性等であった。

表 3 グループ・ディスカッションで学んだこと

	項目	N
1	話し合いをスムーズに行うための言葉選び・話し方	29
2	意見交換・価値観の違いを実感	28
3	アイスブレイクの重要性・自己開示・(初対面)の相手と打ち解ける	27
4	しっかり聞く・傾聴力	18
5	他の学生とのコミュニケーション	17
6	相手の意見を受け入れる・否定的にならない	15
7	役割の決め方・初めに決めておく	14
8	リアクションを大きくとる・ジェスチャー・表情	14
9	盛り上げ方・雰囲気作り	11
10	「雑談」「対話」「議論」のスキルを身に着ける	10
11	スライド作成	10
12	自分の意見をわかりやすく明確化する・伝える	9
13	議論のルールを決める(グランドルール)	9
14	自分から進んで発言する・積極性	8
15	議題に沿って話を進める・流れの把握	4
16	スモールトーク	3
17	たくさん論点を出す・また大切な論点かそうではないのかの分別	2
18	不満や問題を表面化する	1
19	緊張感を持つことが大切	1

4.3 総合考察

4.1の結果より、オンラインと対面でのコミュニケーションにおいて学生が違いを感じるカテゴリーとして「コミュニケーション」「PC操作関連」「快適さ・利便性」が明らかとなった。この結果を参考に、講義の前にあらかじめ注意点や心構えを伝えておくことが効果的であろう。オンライン・対面いずれもメリット・デメリットがあり、状況に応じて適切に対応することが求められる。特にオンラインでは話の内容にフォーカスするなど発表者の心構えはもちろんのこと、聞き手の心構えとしても反応をアイコンで示し、即座に反応するなど双方の積極的な関与が求められる。PC操作関連についても、予想される問題と対策やチェックリストを作成すると受講がスムーズであろう。オ

ンラインでのコミュニケーションの快適さ、利便性についても事前に説明があれば受講者の視野が広がると考えられる。これらの経験は今後、就職活動でのオンラインイベントの対策につながる。

4.2のグループ・ディスカッションで学んだことについては、回答の傾向からグループに分けられた。これらの項目は対面でも共通することから、オンライン・対面のどちらの場合にも対応できるスキルを向上させることができると考える。また両者を比較することで、自身のパフォーマンスについて理解が深まるだろう。表3で結果で明らかになった項目については、具体的に対面との対比からオンラインのグループワークでどのように役立つのかマニュアル等を作成し、事前に理解を深めておくことが効果的であると考えられる。これらのことがオンラインでのコミュニケーションの不安を低減し、見通しを持ってオンラインでのコミュニケーションに積極的に参加するための足場かけになると考える。

5. まとめと今後の展望

本論はTeamsを用いたグループワークの導入方法を紹介し、学習者の認識から教育的価値を考察することを目的とした。Teamsのブレイクアウトルームの機能を用いて、ステップを踏んで受講者の心理に配慮しながらコミュニケーションを扱う講義を遠隔でおこなった。分析結果から、PC環境など対面にはない要素が加わるが、グループワークそのものについてはやりにくさがありながらも、今の状況における利点の方が認識されていた。今後、このような経験が就職活動や新しい働き方につながっていくものと考えられる。オンラインでのスキルを学ぶことは対面でのスキルの向上にもつながり、ひいては単なるスキルの獲得に留まらず、必要に応じて柔軟に新しいスキルを獲得し、学び続けるというマインドの涵養に教育的な価値があると考えられる。

一方、学生がやりづらさを感じた点については事前に受講者と共有し、学習環境や特性に関わら

ずオンラインでのグループワークに参加できるようなサポートが必要である。オンラインでのコミュニケーションの重要性は増すものと考えられるが、遠隔・対面に関わらず学生のニーズに合わせてよりよい教育を提供できるよう研究を継続したい。

参考文献

- 1) 高田和生, 木下淳博, 山口久美子, 須永昌代, 秋田恵一, 若林則幸, 田中雄二郎 (2020) コロナ禍対応で見てきた, ポスト・コロナ時代に目指すべき医歯学教育についての提言 医学教育, 51-3, 372-374
- 2) 半谷眞七子ー医学教育, 2020 参加体験型学習中心であったコミュニケーション教育の遠隔教育移行での教育方略 2020, 51(5) : 544-547
- 3) 中野美香 (2021) 遠隔講義におけるコミュニケーション教育: プレゼンテーション基礎とレトリック基礎の振り返りの分析と提案 基幹教育紀要 7, 31-40 九州大学基幹教育院
- 4) 松下幸司 (2020) 大学の遠隔講義におけるアクティブラーニング型授業の試みーグループ・コミュニケーション・ルームと情報共有ツールを併用してー香川大学教育実践総合研究, 41, 89-98
- 5) Deci, E. & Ryan, R. (1985). *Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior*. New York & London: Plenum Press.
- 6) 塩沢正 (2020) オンデマンド型遠隔授業の活性化: 「異文化コミュニケーション論」の授業を例として 中部大学教育研究 20, 101-114
- 7) 小浜朋子 (2021) コロナ禍における「コミュニケーションのユニバーサルデザイン」に関する考察ーSUACの学生レポートの分析からー 静岡文化芸術大学研究紀要 21, 77-80
- 8) 中野美香 (2018) 大学生からのグループ・ディスカッション入門 ナカニシヤ出版
- 9) Nakano, M. (2019) Four-layered Question approach to discuss social problems in Japan for STEAM literacy: a case of “the declining birthrate and aging society”. The proceedings of the First Ocean Park International

STEAM Education Conference. June 21-22, Hong Kong.

付記

この論文は 2021 年 3 月 9 日に本学で開催された第 20 回 FD Café「ICTを活用した授業実践事例～遠隔授業実施を振り返って～」における発表「Teamsによるグループワークの実践事例」(中野美香)を基に作成された。

謝辞

本研究の実施にあたり, 本学情報基盤センターの成久智彦氏, 内田翔氏から多大なご支援を賜りました。心より御礼申し上げます。またクラスサポーター (CS) の江口ひなの氏には貴重なご助言を賜りました。ここに謝意を表します。